

院内研究大会

第9回医療マネジメント大会

2007. 11. 30

当院におけるハイパーサーミア（温熱療法）の現状

臨床工学課 小澤章宏

I. はじめに

ハイパーサーミア（温熱療法）は、体表に高周波（ラジオ波）を加え加温することで、癌細胞のみを死滅させ、癌細胞の縮小や進行の遅延、免疫系の活性化や放射線、特に化学療法との併用での増強効果など、癌に対しよい効果が期待できる治療法である。ハイパーサーミアの治療法や過去9年間行ってきた治療の現状を報告する。

II. 対象

当院では平成10年12月からハイパーサーミア治療を導入し、平成19年10月までに計5,358回の治療を行い、治療クールは週2回で、3週間で計6回、1回の治療時間は60分間であった。

III. 治療の現状

治療を行った症例の中には、癌細胞の縮小や余命の延長、疼痛の緩和、食欲増進、気分が良くなるな

ど、QOLが向上した例もあったが、単独治療での完治した例は残念ながらない。しかし、従来の癌治療とは異なり、副作用が殆どなく、病態に応じて何度でも治療できる利点を持っている。また、全国でハイパーサーミアを行っている施設も少ないことから、治療を希望する問い合わせが常時あるのも現状である。

IV. 結語

ハイパーサーミアを行うことで疼痛が緩和されたり、また治療法がなく悲観している患者にとっては、ハイパーサーミアを受けられることで希望が湧き、精神的な苦痛から開放されるといった、QOLの向上が認められた。もし、ハイパーサーミアを早い時期から使うことができれば、ガンの縮小や患者の延命にもっと効果が上がると思われる。この治療が患者にとって良い治療であることは言うまでもなく、今後日本において、ハイパーサーミアがより認知されることが強く望まれる。

通院点滴療法室開設から1年の報告 I

～ 看護師の立場より ～

通院点滴療法室 千装真由美 浅場 香 芦川 恵子

通院点滴療法室が開設され1年が経過した。この1年の報告と今後の課題を、看護師の立場より報告する。

I. 通院点滴療法室の役割

近年、通院での外来化学療法はますます増加している。その背景には副作用対策の進歩や在院日数の

短縮、QOLの向上、在宅療養のサポート体制の整備などがあげられる。当院で外来化学療法を受けている患者数をみると、開設前1年では1183件であったが、開設してからの一年で1899件となり大幅な伸びを示している。このように外来化学療法を受ける患者は今後も需要に伴い増加することが予想される。それは患者にとって自分のライフスタイルを維持し、社会生活を営みながら治療が出来るなどの利点もあるが、副作用に伴う身体的・精神的苦痛に関して患者自身が対処していかなければならないことになる。通院点滴療法室はこのような治療過程にある患者が、より安全で確実に治療が受けられるように支援する役割を担っており、当療法室は

- 1) 点滴注射での化学療法を受ける患者さんに、安全・安心してより快適な環境で治療を受けていただく

- 2) 外来化学療法加算(400点)の増収を目標に業務を行っている。この一年でチームで取り組んだ主なものはタキソールの前投薬の統一と乳腺ルチーン検査時の時間調整であった。

II. 通院点滴療法室の看護

通院点滴療法室の看護の目標は

- 1) 外来化学療法を受ける患者が、安心して、安全に治療が受けられる
- 2) 患者個々の生活を尊重しながら、レベルや環境に応じた指導をする

である。1ヶ月程度の開設準備期間であったため、

それまで各科でおこなっていた方法をまとめることは容易ではなかった。まず安全・確実に投与するという目標を第一に取り組んだ。各科の化学療法が一度に集まってみると、同じ薬剤でも前投薬の方法や投与方法が違うなど、実施にあたりエラーを起こしやすい状態であった。そこでチームとしてリスクマネジメントの観点、コストの観点より前投薬の統一について取り組むことにより、現在は改善され、時間を患者指導にあてることができてきている。

外来は病棟と異なり、患者とは非常に短い時間がかかわることを余儀なくされているため、短時間で効率よくポイントを押えた患者教育が必要とされ、治療後の患者の生活を予測・判断していくことが求められる。現在は次のステップとしてこの患者指導に取り組んでいる。診察の前の採血・ルート確保を通院点滴療法室で行い、前回の治療後の自宅での生活と副作用の程度をアセスメントし、診察時にDr.に伝えるべき副作用の症状や表現方法について患者に指導している。

III. 今後の課題

個々にあわせた看護を提供するために、一回ごとの治療ではなく継続的に患者の状態を把握し、治療期間を通して患者が「自己効力感」を持てるようにかかわっていくことが必要であることも、患者の経過をみていて感じている。今後は各科外来、病棟、緩和委員会等とも連携をとり、看護を深めていきたいと考えている。

通院点滴療法室開設から1年経過報告Ⅱ ～ 薬剤師の立場より ～

薬剤部 祖父江 彰

近年、DPCの導入や新しい抗がん剤の開発などにより外来での抗がん剤治療が盛んに行われている。また、病院側の都合だけでなく、患者側としても外来で抗がん剤治療を受けられるということは入院での治療に比べ精神的な負担も少ない。そこで当院でも外来点滴療法室を立ち上げることとなった。

今まで行われていた薬剤部での注射の混注業務はCVの混注のみで抗がん剤の混注は初めてであり戸

惑うことも多かった。

薬剤部での混注にあたり、「安全」「迅速」「正確」なミキシングを目標としている。「安全」に関しては患者の安全はもちろん、細胞毒性のある抗がん剤を扱う医療従事者の安全も配慮しなければならない。投与量に関しては3回のダブルチェックを行っている。ミキシングに関しては安全キャビネットの使用により、抗がん剤の無菌的で被ばくの少ないミキシ